

TOKYO INSTITUTE OF TECHNOLOGY CHRONICLE
東工大クロニクル

No.432

May 2008

CONTENTS

新監事挨拶

- 2 西村吉雄 監事
- 3 鈴木基之 監事

ニュース・イベント

- 4 -Pathway to Global Edge -vol.2-
グローバルコミュニティ@東工大
Global Edge Institute の成り立ちと顔ぶれ
- 6 すずかけ台キャンパスに3つの広場がオープンしました
- 7 アジア人財構想オフィス主催
「留学生のためのキャリアトーク」開催
- 10 〈ことづくり〉フォーラム開催
-学生支援 GP 本格始動へ-

学生

- 12 「新日本製鐵株式会社 君津製鉄所の見学
-国際大学院プログラム “Sustainable Engineering Program”
サテライトセミナー」
- 14 -我が東工大の誇る体育系サークル-
競技スキー部「寒い季節の熱い戦い」
- 16 バレーボール部「ボールに伝わる仲間の思い」
- 17 平成20年度 類別クラス担任・クラス担当助言教員等一覧
- 18 平成20年度 学科長及び2年次以降の助言教員名簿
- 19 平成20年度 専攻長一覧
- 20 人事異動



「留学生のためのキャリアトーク」開催



〈ことづくり〉フォーラム開催される



連載 我が東工大の誇る体育系サークル

新監事挨拶



監事 西村 吉雄

富浦前監事のご勇退に伴い、この4月1日から常勤監事に就任いたしました。ただし法人化直後の2004年4月以来ずっと非常勤監事をつとめておりました。平均すれば週に1回ほど東工大に来て、役員会などの会議に出席し、好き勝手に意見を言う——これが私のしてきた「仕事」です。

監事は法人化前の国立大学にはなかった役職です。国立大学法人法には監事は「業務を監査する」とあります。なお会計監査は、外部の監査法人によって行われています。

国立大学法人の監事の仕事は、法人の統治（ガバナンス）に関係します。国立大学法人には、役員会、経営協議会、教育研究評議会の三つの会議をおくと法は定めています。学長は大学運営に関する重要事項をこれらの会議にはからなければなりません。けれども上記三つの会議はいずれも、多数決の場ではありません。はかたうえで学長は、自らの考えで意思決定することができます。そのうえ三つの会議の構成員は学長が任命します。こういった意味では、国立大学法人の学長の権限は、株式会社の代表取締役より強大です。株式会社では、株主総会や取締役会において、代表取締役の考えが多数決で否決されることがあります。

監事は学長の任命ではありません。学長と同じく、文部科学大臣が任命します。監事は上記三つの会議に出席して意見を言うことができますが、決定には加わりません。ただし学長の決定を望ましくないと判断したときは、文部科学大臣に意見を述べることができます。これは逆も真で、監事の行動を望ましくないと学長が判断したときには、学長はそのむねを文部科学大臣に言うことができます。多数決の場のない国立大学法人において、文部科学大臣を介しての学長と監事の関係が、統治機構を形成していると言えるでしょう。

話が少し大きくなりました。監査とは見ることと思い、とりあえずは東工大キャンパスを歩き回っ

ています。実は過去数年、出張や旅行のついでに、なるべく大学を見るようにしてきました。近頃元気だとか、最近がんばっていると評判の大学では、学生が元気で楽しそうにしています。またキャンパスの手入れがよく、きれいです。学生の表情とキャンパスのきれいさを見ると、その大学の活気がわかる——こう考えて東工大を見て回るところから、常勤監事の仕事を始めています。よろしくお願ひします。

4年前の非常勤監事就任の際、自己紹介を書かせていただきました。今回初めて私のことを知る方もおられると思い、以下に自己紹介を抄録します。

学部卒業は1965年（昭和40年）、東京工業大学の電子工学科を出ております。1967年に修士課程、1971年に博士後期課程を修了しました。私が学部学生だったころの東工大には人文関係併習課程という制度があり、永井道雄先生や川喜多二郎先生の研究室に入り浸っておりました。自覚的には私は半分以上人文関係卒です。

大学院では末松安晴先生（後に東京工業大学学長）のご指導を受けました。伊賀健一現学長は、研究所の2年先輩です。博士後期課程在学中にフランスに留学します。フランスのいわゆる「5月危機」やチェコの「プラハの春」に遭遇しました。帰国した日本では、東大も東工大も大学紛争です。

なんとか学位をいただいて大学院を修了したのですが、世界的な大事件を渦中で経験したせいとか、ふつうの研究者を続けることに抵抗を感じるようになっていました。日経マグロウヒル社（後の日経BP社）という出版社に入り、『日経エレクトロニクス』という雑誌の編集長を11年半ほどつとめます。これが私の職歴の中核です。その後2002年2月から東京大学教授を経験しました。ただし2003年3月末には早くも定年退官。400日ほどの東大教授でした。現在は東工大監事のほか、早稲田大学で科学技術ジャーナリスト養成プログラムの客員教授をつとめております。

著書には『硅石器時代の技術と文明』、『半導体産業のゆくえ』、『テクノロジー・ワンスモア』、『電子工業50年史』、『情報産業論』、『中央研究所の時代の終焉』（翻訳）、『産学連携』、『MOT 産学連携と技術経営』、『MOT 大企業における技術経営』、『大学はなぜ必要か』などがあります。



監事 鈴木 基之

このたび、はからずも本学の活動のお仲間に入れて頂くことになりました。非力な新人であり、皆様のご教示を頂くことを願っております。

私自身は、1970年代の初めに東大の生産技術研究所において環境化学工学の研究室を始め、以来、吸着工学、水処理技術、水環境モデル、バイオアッセイ、地球生態工学、バイオマス、ゼロエミッションなどをキーワードとして研究生活を過ごしました。また、1995年からは所長として六本木から駒場への移転計画の推進や、3年間をかけた外部評価（国際、産業界、学術面それぞれから各年）を行いました。当時、東工大の精密工学研究所（精研）の所長を伊賀先生（現 学長）がお務めでした。98年からは国際連合大学の副学長として「環境と開発」プログラム部門を担当し、国際機関を身近に経験するなど、若干変わった道も歩きました。2003年からは、国際連合大学の特別学術顧問を務める一方、放送大学において環境工学などを担当して現在に至っております。

この間、学会活動や、種々の研究プロジェクト、国の委員会などを通じて本学の先生方とも色々とお付き合いさせて頂いた他、研究所の評価、UNESCO プログラムの評価など、多様な面で共同作業をさせて頂く機会もありました。もう御退官された先生方にも大変お世話になり、今でもご叱責頂ける先輩もおられます。しかしながら、科学技術に特化した大学として我が国最大の規模と実績を有する本学の全体像を知るにはもちろん程遠く、今後、非常勤ではありますが監事として色々とお知らせさせて頂こうと思っております。

さて、最近の大学の置かれている状況は、申すまでもなく厳しいものがあります。国立大学法人化、競争システムと評価システムの強化など、研究・教育を取り巻く環境は目まぐるしく変貌しているかのように見え、また男女共同参画、外国人教職員の登用など、一般社会からの体制面での大きな立ち遅れの解消も求められるなど、解決すべき問題点は数限りなく多いように見えます。しかし、これは一方において社会の大学に対する大きな期待の表れであると言えるでしょう。

前世紀の最後の十年ごろからの世界の変化により、

我々人類は、これまで全く経験しなかった新しい問題に直面しています。（1）東西の壁が崩れ、今まで見えなかったところがはっきりと見えるようになり、経済面をはじめとし、価値観が一極化に向かったこと、（2）インターネット等の普及に象徴される高度情報技術化により地球の隅々まで情報の共有化が可能となり、情報距離が短くなったこと、（3）地球温暖化に代表されるように地球の物理的なシステムが最早神秘的ではなく、かなりの精度で将来予測も可能となったこと、この3つの大きな変化が、地球を小さなものとしたと言え、地球の容量の有限性を実感させることとなりました。一方において、地球上の人口は周知の如く、1950年には26億人であったものが、2000年には60億人を超え、2050年には90億人を超えようとしています。人口増加の大半は途上国におけるものと推算されていますが、小さな地球で、これからの人類活動をどのように進めていくのでしょうか。この根本的な課題に、世界全体でどう応えるのか、わが国はどのような役割を果たすのか、これがまさに「持続可能な人間活動を如何にして構築するのか」という問いかけです。人類500万年以上の歴史の上で、地球の有限性に真に対面したのは、現在の世代が初めてなのです。

このような時代にあって、大学の果たすべき役割は極めて大きいものがあるでしょう。大学というのは、アカデミックな自由を社会から保障されている存在であり、大学の構成員がこの大きな権利を享受することの意味は、将来の人類の、あるいは社会のあるべき姿に関して、現在の価値観から解き放されて自由に発想し、研究をすすめる、次の世代の育成にあたり、優れた社会システムを創造することにより、持続可能な人類の活動を構築していくというミッションを社会から負託されているということでしょう。このためには、長期的なビジョンに基づき、国の将来、人類の将来に向けた格調の高い提言を示していくことが必要であり、そこに向けて貢献できる科学技術の面からの研究成果の発信とともに、有為な人材を育成していくことに全力を注がねばなりません。このような、将来ビジョンを考え続けるためには、現状の価値観を離れ、大学自身もその新しい将来像を見据えることが必要でしょう。現状の補正、修正からではなく、将来像からバックキャストにより改革の方向を大胆に提示することが期待されています。創設130年を迎える今の時期は、次の30年に向けた意識の変革を共有し、10年後の具体的な姿を描くための絶好の機会となるのではないのでしょうか。

ニュース・イベント

—Pathway to Global Edge - vol.2—

グローバルコミュニティ@東工大 Global Edge Institute の成り立ちと顔ぶれ

東井 亜紀

4月号では、東工大の人事制度の改革という側面からグローバルエッジ研究院を紹介しましたので、今号では、この「国際村」とも言えるユニークな研究院の誕生と顔ぶれについて、時間を少しさかのぼってご紹介したいと思います。

命名「Global Edge Institute」

はじめに、よく聞かれる質問にお答えしたいと思います。「グローバルエッジってどういう意味？」。

研究院設置を1ヵ月後にひかえた2006年6月。本蔵前理事・副学長（企画担当）の指揮のもと、「将来世界のリーダー的存在となるべく若手科学者を輩出する国際的な組織」というイメージが掲げられ、新組織の立上げ準備が始まりました。

まずは、象徴となる、世界に通用する英語名称をつけようと、主に部局長で構成される設置準備会のメンバーによって検討がなされました。外国語研究教育センターの木山ロリダ先生のところへも何度か相談にうかがい、ネイティブの立場から名称候補と助言をいただきました。新しい何かが誕生する前のわくわく感が高まっていくなか、最終的に、多数の候補のなかからイメージが凝縮された以下の案が選ばれました。

—“*Global Edge Institute*” includes the concepts of international scope and use of English (*global*), top-class research, speed, and leadership (*edge*), and a solid but dynamic organization (*institute*). It is short enough to remember and not to be abbreviated in everyday speech.

のちに「研究に国境はない」というある特任助教の言葉を耳にすることになりますが、東工大、日本という枠を越えた存在になるようにという願いが込められた象徴的な名前だと思います。

一方、日本語名称はというと、どのような漢字を並べても不思議と全員がこれだと思えるものがな

く、思い切ってそのままカタカナ表記にするということで意見が一致しました。英語名称を看板として掲げていくという相澤前学長の方針にも反映されていますが、英語を公用語とする以上、日本語（日本文化）に足を引っ張られることなく軸足を世界に置くことが求められている現状を考えると、改めてこの選択が重要であったことに気付かされます。

これが東工大の一風変わったコミュニティ、Global Edge（グローバルエッジ）の幕開けです。



Global Edge ロゴとその由来

このコミュニティを構成する面々

さて、このグローバルな集まりですが、実は、ひとつの拠点にまとまっているわけではありません。基本的にはバーチャルな組織です。必要なときに集まることはありますが、それぞれに専門も違えば居場所も違います。2008年4月1日現在、グローバルエッジ研究院を職場とするメンバーは、メンター1名、特任助教17名、研究補助者9名、そして事務スタッフ7名の計34名です。すでにここで一時期を過ごし巣立っていかれたメンバーも含めると延べ56名となり、その国籍は14ヶ国に及びます。当然ながら Global Edge 以前に歩んできた道のりも多種多様で、いろいろな意味でボーダレスなコミュニティです。共通点を何かあげるとしたら、大半が30代であるという点でしょうか。日本国内ではなかなか得がたい、刺激的なコミュニティです。

GE 事務の開設

ここで少し特任助教が採用され始める前の、事務の立ち上げにふれておきたいと思います。

2006年5月下旬、ちょうど私が留学生センターの先生方のもと大学院講座「科学技術コミュニケーション論」立ち上げプロジェクトの任期を終えようとしていた頃でした。東工大が科学技術振興調整費「若手研究者の自立的な研究環境整備促進プログラム」に採択され、新組織設置のための体制づくりが進行しており、幸運にも私もスタッフとして迎え入れられることになりました。何でも大学をあげてテニユアトラックという制度を初めて導入する年間約3億円規模の大プロジェクトとのこと、最初は事業スケ

ールの大きさに戸惑いましたが、「将来ノーベル賞を受賞する可能性を秘めた優秀な若手研究者を世界中から集めよう」という一声に魅了され、今にいたっています。同じように引き寄せられてきた仲間が次々と加わり、できあがったのが今の「Global Edge Office（通称“GE 事務”）」です。

GE 事務は、事業の提案段階から1年余りの間、準備・運営を中心に担ってきた総務課総合企画係のもと、その一角に居候をする形でスタートしました。東工大事務のベテランから、外部出身者（人材開発コンサルタント会社、航空会社、インターナショナルスクール事務局、IT 教育系ベンチャー）まで、多様なバックグラウンドを持ったメンバーで構成されているため、それぞれの経験を活かしながら日々仕事を進めています。

そんな GE 事務に課せられた最初の仕事が、設置後すぐに開始する国際公募の準備でした。募集要項の作成、応募者の問合せ対応、労働条件の説明、手続書類の英訳など。日本にいながらにして英語漬けという“公用語＝英語”の世界の始まりです。

世界中からの応募、そして選ばれた17名

東工大テニュアトラック特任助教の国際公募は、2006年度から毎年度行われています。これまでの公募では、日本人・外国人ともに国内外から多数の応募がありました。そして、総勢約70名の選考委員による慎重かつ厳正な選考の結果、激しい競争を経て、掲げていた理想通り、グローバルな若手研究者が採用されることになりました。専門分野も、物理、地惑、情報、バイオ、化学、エネルギーなど多岐にわたっていて、まさに多文化・多分野コミュニティです。これから来年度に向けた公募の検討が始まりま

すが、新たにどのようなメンバーが加わることになるのか楽しみです。

公 募	応募件数	採用人数
2006年度	317 (193)	12 (3)
2007年度	172 (88)	3 (3)
2008年度	127 (46)	2 (2)

応募数と採用数 * () 内は日本人で内数

Global Edge な日常

では、現在、それぞれがどのように Global Edge な毎日を送っているのでしょうか。

基本的に特任助教は、それぞれ支給されるスタートアップ資金を元手に、自分の研究室に必要な機器等を取り揃えたり研究補助者を採用したりしながら、出張に飛び回ったり実験に打ち込んだり外部資金獲得に奔走したりと、思い思いに研究活動を行っています。Global Edge というつながりが可視化する場面としては、お互いの研究分野について学びあい情報交換をする月1、2回の GE セミナーや、年度の集大成として成果発表を行う3月のシンポジウム、そして時折番外編として開く、Club Global Edge（都内の世界各国のレストランをめぐりながらサイエンスなどについて語る会）があります。近頃では、このような場で分野の異なる特任助教達が共同研究をしようという話があがっているようで、さらなる広がりが出てくる予感がしています。

さて、次号からは特任助教の紹介もしていく予定です。グローバルエッジのホームページ〈www.global-edge.titech.ac.jp〉への皆さまのご訪問もお待ちしております。



Global Edge Faculty Members 研究成果発表シンポジウムにて－2008.3.10.

(Global Edge Institute サポートスタッフ)

すずかけ台キャンパスに3つの広場がオープンしました

屋井 鉄雄*, 大倉 一郎**

すずかけ台キャンパスの将来計画「ペリパトスの研社21」に位置づけられた3つの広場の一部がそれぞれ工事を完了し、このほどオープンしました。多目的の運動広場（写真1）、エントランス部の広場（仮称：すずかけ広場、写真2、注参照）、中央に位置する広場（仮称：中央広場）の一部を構成する扇型調整池前の小広場（写真3）です。

今回の整備によって、キャンパス内の広場空間が拡大し、昼食時などにベンチに座り談笑する学生たちも見られるようになりました。キャンパス内を歩くことが楽しくなったとの声も聞かれます。長らく懸案であった運動の広場と憩いの広場が漸く新設され、将来計画に基づく継続的な整備の新たな一歩となりました。

今回の整備箇所については、今後さらに、①運動広場の利便性を高め、法面や散策路などの周辺整備を行うこと、②すずかけ広場（仮称）の全体整備を、すずかけトンネルの計画に合わせて行うこと、③大会館、生協食堂周辺に分散する広場空間を一体化



写真1 キャンパスを臨む高台に多目的の運動広場が整備されました



写真2 すずかけ通用門を下ったエントランス部の広場が整備されました



写真3 大会館（生協食堂）前に小広場が新設されベンチが置かれました

し、中央広場（仮称）として整備し、調整池にかかる橋や加藤山の散策路（ペリパトス）との連携を強化すること、などが予定されています。

また、キャンパス将来計画に基づき、引き続きキャンパス各所で新たな整備が進められる予定です。特に、①すずかけ広場（仮称）と扇型調整池の小広場間の道路の環境整備は、キャンパスの実質的なメインコリドーとして、また歩行者ネットワークであるペリパトスの一部として最優先課題です。ご存知のように、この道路の途中にある精密工学研究所の建物出入口は既に広場整備に合わせて改修されています。また、②すずかけ（通用）門の一部を拡幅する整備も予定されています。

キャンパス将来計画の策定から広場のデザイン、工事中の材料選定に至るまで、奥山信一准教授（総合理工学研究科人間環境システム専攻）を始めとする施設整備専門班のメンバーには、施設運営部の担当の方々と共に、精力的に働いて頂きました。各所に配置されたサイコロ型の照明は中村芳樹准教授（同専攻）の研究室のデザインです。また、すずかけ台5部局長等懇談会の先生方や、同懇談会の下に設置された大町達夫教授を代表とするワーキングの方々など、多くの方々のご協力やご支援によって円滑に整備が行えました。この場を借りて心より感謝申し上げます。

さて、すずかけ広場（仮称）には、シンボルツリーとして小さなけやきが植えられました。立ち木の成長を横から眺める親の心のように、末永く成長を見守って頂きたいと思います。今後も引き続き、キャンパスの整備、環境改善にご支援頂きますようお願い致します。

注：この機会に、ご提案等も受けながら、本学として愛着の持てる広場や通りの名称を定めたいと考えています。

（*施設整備専門班すずかけ台キャンパス WG 主査、
総合理工学研究科人間環境システム専攻教授、
**理事・副学長（企画担当））

アジア人財構想オフィス主催 「留学生のためのキャリアトーク」開催

廣瀬 幸夫

【10年後の東工大留学生数を見据えて】

最近、中央教育審議会は教育振興基本計画の答申の中で、今後5年間に取り組む施策として2020年をめどに「留学生30万人計画」を実現することを謳っています。この計画に基づけば10年後東工大は全国の留学生の約1%に相当する3000人（2008年4月現在、約1100名）がキャンパスを埋めることになります。そのうち、約25%の留学生（700-800名）が毎年卒業・修了し、ほとんどの留学生が企業へ就職を希望することになりましょう（2007年3月現在、日本・日本企業への就職実績、博士17名、修士53名、学部14名）。

すでに、留学生センターでは、東工大における留学生数の経時変化をシミュレーションし、その結果、東工大の10年後の課題が留学生の卒業後のキャリア形成支援とその体制にあることをいち早く予見しました。こうした課題に適切に対応すべく、昨年、留学生就職専門委員会（留学生センター所管）を発展的に解消し、教育推進室（斎藤彬夫理事・副学長）の下にアジア人財構想オフィスを設置しました。

【アジア人財構想オフィスの役割】

アジア人財構想オフィスの使命は、留学生のキャリア形成を支援し、社会人になるための産学連携教育を企画立案実行することにより、高度でかつ幅広い専門能力と社会適応能力を兼ね備えた人材を育成することにあります。今年度より新たに技術日本語科目などの「大学院留学生科目」を開講しました。

従来は留学生の就職相談にその都度対応していました（単発的事案対応型）。これでは留学生の数が増えれば相談案件が幾何級数的に急増します。その対応策として、留学生個人個人の高度専門教育を念頭に置いたキャリア形成を行うことにより、的確に卒業後のキャリア形成モデルを開発し、事例を蓄積することにより、多様な好ましいキャリアを明示することができます。先輩留学生の多くの事例から留学生自身がありがたい姿を思い浮かべることが出来れば、留学生が自律的に自らのキャリアを考えることが出来るようになります。こうしたキャリア形成支援体制の確立を目指します。

【留学生のための就職説明会（キャリアトーク）】

経済産業省関東経済産業局委託事業として、「留学生のためのキャリアトーク」を去る4月9日（水）大岡山キャンパス西9号館デジタル多目的ホールで開催しました。今年で4回目を数え、着実に定着しています。参加者は日本・日本企業への就職に関心のある留学生約110名、参加していただいた企業は、東工大留学生を採用したい企業19社です。

多くの日本企業は「採用に日本人学生と留学生は区別しません」と言っています。しかし、この言い方には、「日本人学生が来れば優先して日本人学生を採用する」本音が見え隠れします。これを知らずに多くの留学生は面接に落ちて傷つき、日本企業ひいては日本にさえも不信感を持つようになります。こうした実情を踏まえ、真に東工大留学生を積極的に採用したい企業にブース出展をお願いしました。

留学生センター長大熊先生の開会の挨拶に続いて、大学の留学生就職支援体制と今回のキャリアトークの意義が説明されました。今回は特に、留学生が多くの出展企業に足を運び、企業担当者と直接話す機会を作ることに重点を置きました。

「外国人留学生のための就職ハンドブック（オフィス作成）」を配布しました。そこには日本企業に就職する流れをわかりやすく解説し、エントリーシート の書き方や面接当日までの準備と心構えを英語との対訳でまとめてあります。

留学生が出展企業に訪問するとき、「訪問カード（オフィス作成）」に留学生の専門分野や連絡先を記入し、出展企業に提出してもらいました。これにより、出展企業も留学生の経歴が分かり相談しやすくなりました。

会場は多くの留学生で溢れました（写真1、2）。正味2時間では足りなく、もう少し時間が欲しいというブースもありましたが、訪問カードを使って後日企業から連絡を取って頂くことにしました。



写真1 出展企業ブースでの相談



写真2 出展企業ブースでの相談

【キャリアトークのアンケート結果から】

キャリアトークに参加した企業と留学生の皆さんにアンケートを行いました。企業からの意見として、東工大留学生が他の外国人人材と比較して評価できる点として、前に出る力（チャレンジ精神）やチームワーク力よりも考え抜く力（課題発見力・計画力・創造力）を期待していました。同時に、研究・開発分野での活躍が期待されていました。東工大留学生を採用する際に日本人学生と比べて、不安な点は定着率／離職率、語学力・日本人とのコミュニケーションを主に挙げていました。こうした傾向は、従来のアンケート結果とほぼ同様のものでした。技術日本語科目の立ち上げは、こうした企業や留学生の不安に応えることになりましょう。

一方、留学生のアンケートから、来場のきっかけは、ダイレクトメール（DM；オフィス作成）が50%、友人からの連絡が20%、Emailによる連絡が10%でした。これに対し、学内掲示は留学生課の掲示以外ほとんど来場のきっかけになっていませんでした。今回のDMは、2008年9月および2009年3月に卒業・修了見込みの留学生308名に送付しました。DMが留学生に周知する方法として有効な手段であることがわかりました。将来的には、留学生のEmailアドレスが管理・更新されてもれなく情報が伝わるシステムの構築が待たれます。

この説明会では留学生が直接企業の方と面談する機会を作りました。留学生は5社以上訪問した者が35%、3社訪問した者が27%の順で、積極的にブースを回った姿がみえます。企業別に訪問した留学生数を図1に示します。多い企業では20名くらいの留学生が押し寄せ、少ない企業では10名弱でした。留学生は知名度の高い企業に集まるという傾向が窺えます。企業のブースには企業名と主な製品などが掲

示されておらず留学生にとって企業イメージが伝わりにくかったため、新たな工夫が今後の課題でしょう。

【おわりに】

留学生が真剣にブースで話す姿を見て、キャンパスで就職説明会を行う意義を実感しました。留学生からは、今後もキャンパス内で説明会を数多くやって欲しい、生命系の留学生が行ける企業が少ないなどの要望がきています。アジア人財構想オフィスでは留学生の要望にこれからも応えていきます。

就職に当たって、留学生側にも多くの問題があります。知名度の高い企業に集まり、自分が会社や社会に何ができるかを考えていません。留学生が社会に出ることの意味を深遠に考えることができるように、アジア人財構想オフィスの活動を通じて促していきたいと考えています。ご不明な点は、以下にお問い合わせください。

場 所；大岡山キャンパス南1号館263号室
電 話；03-5734-3122（田村）
メール；asia.off@sim.ceram.titech.ac.jp

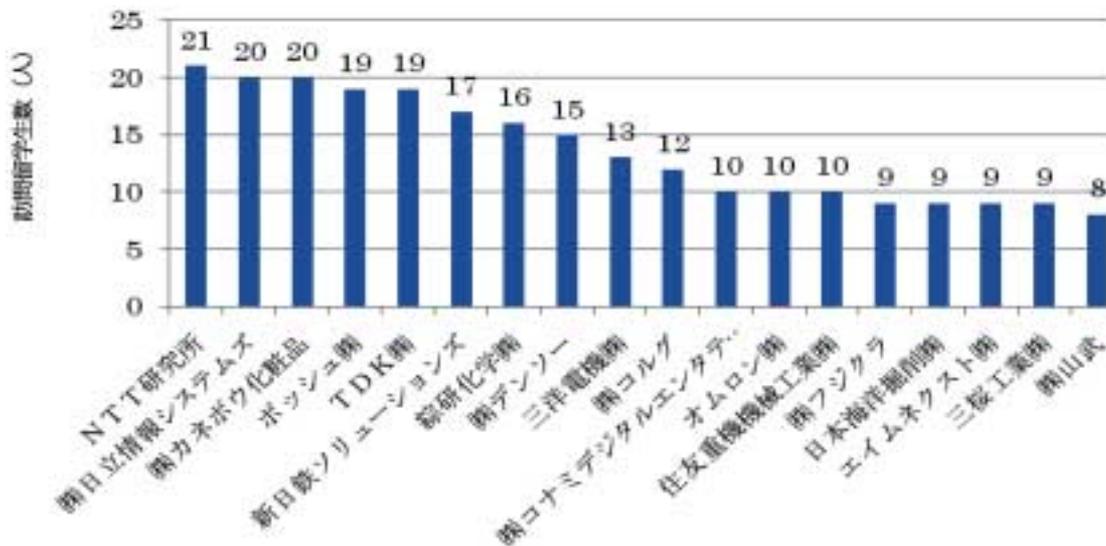


図1 出展企業を訪問した留学生のべ人数

(アジア人財構想オフィス長兼留学生センター 教授)

〈ことづくり〉フォーラム開催

—学生支援 GP 本格始動へ—

学生支援 GP 実施チーム
チーフ 齋藤 憲司

去る2月27日（水）に、学生の皆さんが自主的・主体的に関与する諸活動が集結して、第1回〈ことづくり〉フォーラムが開催されました。

このフォーラムは文部科学省が平成19年度から開始した「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」（通称：学生支援 GP (Good Practice)）に本学から申請・採択となった、「3相の〈ことづくり〉から社会へ架橋する—問題解決型支援から成長促進型支援へ—」の一環として企画されたものです。

(1) 学生支援 GP の概要

東工大から申請した取組内容は、理工系学生にこそ必要な社会とのコミュニケーション能力の深化と拡大を図ることを意図したもので、以下の3相から構成されています。第1相：できごとの「事」（リーダーシップや企画力を伸ばすための〈行動する〉仕掛け）、第2相：ことのはの「言」（自省／科学用語を自前の言葉でく伝える）／相手の意図をく読み取る文章コミュニティ）、第3相：ことなるの「異」（千人留学生と日本人学生の交流をく広げる）組織と企画づくり）、という基本イメージを想定して、図にあるような多様な支援形態が連携しつつ、学生の皆さんが相互に支え合っていく試みを展開していこうと発案されたものです。主として研究室所属以前の学部1～3年生の皆さんを視野に入れて、サークルやクラス・学科単位の交流とはひと味違う活動・交流を巻き起こすことが期待されています。



図 〈ことづくり〉ムーブメント

その背景には、最近の学生相談（カウンセリング等）の傾向として、自己表現や対人関係に苦勞している皆さんに出会うことが多い、という事情もありました。

(2) 〈ことづくり〉フォーラムの様子

今回のフォーラムは既存活動の新たな展開や新しい活動の創出をめざしていく、その第一歩として開催され、当日はまず、ゲスト講師の布柴達男先生（東北大学生命科学研究科准教授）より「サイエンスエンジェルを中心とした交流支援の実際」（主として女子学生による小中高への科学アウトリーチ活動）、内野悌司先生（広島大学保健管理センター准教授）からは「学生による学生のための活動」（ピアサポートとして先輩が後輩の相談にのる相互支援）について、それぞれ30分ほど話題提供して頂きました。

次いで、参加学生の皆さんから順に活動紹介をお願いしました。「キャンパスガイド」「広報サポート」「ピアサポート」「学勢調査局」「サイエンスインストラクター」「ゲームコンテスト」「コラムランド」「サイエンスカフェ」という多彩な活動群で、数分という短い時間に実に気持ちのこもった、そして工夫をこらした発表をしてくださいました。当日ご参加下さった理事・副学長（教育担当）／学生支援センター長の齋藤彬夫先生からも、「目のキラキラした皆さんに会えてうれしい」という励ましの言葉を頂くことができました。

その後は、お茶菓子を囲みながら、ゲスト講師との意見交換や学生・教職員を問わず専門・活動分野を越えた多彩な交流、さらには場所を移して手作り料理のもとでの懇談と、交流の輪が広がり対話が深まっていきました。楽しく有意義なスタートが切れたこと、そして参加して下さった50名近い学生・教職員の皆様、開催にあたりご尽力下さった方々に心より感謝いたします。



フォーラム懇談（エンジェルの秘密開示中）

(3) 今後の展開と環境整備

言うまでもなくこの学生支援 GP の主役は学生の皆さんですが、教職員もともに協働する形態を志向し、かつ環境整備にも力を注いでいきたいと思っています。

学勢調査でも明らかになったのですが、重要なお知らせが意外と学生の皆さんに届いていないなど、相互交流のための情報共有が難しい実態がある様です。この現状を少しでも改善するために、学内各所に電子掲示板システムの導入を進めています。まず卒業式／入学式における学長：伊賀健一先生のご挨拶上映を出発点として、順次、たいせつな情報やメッセージを伝えていきます（現在、体育館入口、百年記念館、西5号館、すずかけ台 B1 棟に新設／図書館、留学生センターのご厚意で既設のものにも接続）。

また、〈ことづくり〉リーフレットの作成・配布、学生支援センターと連動した HP 開設、教職員対象の学生支援力向上企画（研修）、国内外学生支援先進校との交流・実地調査等を組み合わせた総合的な取組みを展開していきます。



〈ことづくり〉の輪を広げたい

(4) 学生支援 GP チームの構成

学長裁量スペースとして南1号館5階に「学生支援 GP 室」を設置し、ここに特任教員2名（保科公彦・山田恵美子）と事務担当が居を構え、いつでも学生のみなさんとの交流を待っています（内：7629）。全体の方針策定については、学生支援センターのもとに実施チーム（コアメンバー）を組織し、教員は篠崎和夫（材料工学）、鈴木正昭（化学工学）、野原佳代子（留学生センター）、山室恭子（社会学）そして筆者の齋藤（チーフ）、事務は学生支援課を中心とする学務部の皆様で進めています。さら

に企画・領域ごとに、トピックスメンバーとして GP に参画される教職員の輪を広げていく形態をとっています（現在、高橋宏治（電気電子工学／掲示板システム等）、武井直紀（留学生センター／留学生支援）、武藤滋夫（社会学／ゲームコンテスト）の各教員にご助力頂いています）。こうしたメンバー構成になったのは、昨年の夏、申請書作成グループが教育推進室企画会議メンバー内から有志を募るかたちで形成されたことに端を発しています。それゆえ学内に多数ある GP でも珍しい横断的ネットワークを組むことができました。

ただ、なにぶんにも慌ただしいスケジュールの中での申請作業であり、19年度事業では広報や協力依頼を十分に発信できていない面がありました。20年度からの3年間は、じっくりと腰を落ち着け、学生の皆さんから創出される新たな活動やアイデアを側面から支える黒子役として、そして学生を支援したいと願っておられる多くの教職員の皆様とともに、東工大らしい学生支援事業の展開を志していきたいと思っています。今後の活動にどうかご期待ください。

（保健管理センター 教授，カウンセラー）

学 生

「新日本製鐵株式会社 君津製鐵所の見学 —国際大学院プログラム “Sustainable Engineering Program” サテライトセミナー—

山本 裕子

2008年3月6日から3月7日の1泊2日の日程で、工学系国際大学院プログラム “Sustainable Engineering Program” の活動の一環として新日本製鐵株式会社君津製鐵所の見学が行われました。世界10ヶ国からの留学生計25名と、TA15名、先生方8名が参加し、製鐵産業における持続可能な開発について新日鐵の方々から直接説明を受け、さらに実際に製鐵所内の各機構を近くから目にする事ができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。

2007年10月からスタートした “Sustainable Engineering Program” は、“Development and Environmental Engineering Course”, “Nuclear Engineering Course”, “Infrastructure Metallic Material Course”, “Mechanical and Production Engineering Course”, “Information and Communication Technology Course”, “Advanced Materials and Chemicals Processing Course” の6つのコースからなり、各コースに3～6名の留学生が在籍し、それぞれの専門のみならず「持続可能な発展」という共通な目的について専門を跨ぐ横断的な講義や活動を行っています。今回の見学会はその一環で行われるサテライトセミナーの記念すべき第1回目です。単なる見学会ではなく、1月のオリエンテーションにおいて、コースごとに各専門分野の視点から製鐵産業における持続可能な開発に貢献する技術について調査・検討し、2日目に行われるセミナーで発表するという課題が与えられ、TAを含めてその準備を進めてきました。そして、この見学会では事前の準備で浮かび上がった疑問点を、新日鐵の方からの説明や、見学過程、さらに直接質問することで解決し、新たな情報を加えてプレゼンテーションを完成させることも目的としていました。

6日の朝は8時45分に大岡山キャンパス正門をバスで出発し、君津製鐵所内君津テクノロジーセンターを目指しました。途中、東京湾アクアラインの海ほた

るPAに寄ったのですが、天気が気持ちがいいほどの快晴で富士山を背景に記念写真を撮ることができたのは非常に幸運だったと思います。君津製鐵所に近づき、製鐵所の全体像が見えてくるにつれ想像をはるかに超える規模にバス内から驚きの声が上がりました。テクノロジーセンター到着後は、まず君津製鐵所の概要について、東京ドーム220個分の敷地面積を持つことや、製品の質、設備、生産量において日本国内の製鐵所のトップに位置することが紹介されました。その後、新日本製鐵株式会社全体の環境対応と、君津製鐵所における資源・環境・エネルギー面での取り組みについての説明を受けました。新日本製鐵ではエネルギー使用量が日本全体の約3%を占めており環境に及ぼす影響が大きいため、会社全体として環境負荷低減に向けた具体的な取り組みを行っているようです。その結果、エネルギー効率は約60%、再資源化率は98%を達成しています。説明を受けた後は、昼食を取ったのですが、学生が昼食の間も新日鐵の方に質問をしている姿が印象的でした。

昼食の後はいよいよ作業着、ヘルメット、軍手を着用して製鐵所内の見学が始まりました（写真1）。広い所内はバスで移動し、持続可能な開発というテーマに基づいて、高炉に使用するコークス等を廃プラスチックから再生するリサイクル設備、製鐵所排ガスから液体水素を製造する設備、排ガスからCO₂を分離回収する試験設備、製鐵ダストから鉄分を回収・リサイクルする設備、さらに乾式コークス消化設備、コークスの潜熱を回収する省エネ設備などを見学させていただきました（写真2、3）。また、厚板工場では、見学通路は圧延機からかなり離れているにもかかわらず、真っ赤に熱せられた厚板が前を通ると、顔に熱さを感じる事ができ、ダイナミックな圧延過程に留学生全員が興奮気味に見学して



写真1 製鐵所内見学出発前の様子



写真2 説明を受ける学生達



写真3 高炉を背景に記念撮影

いました。出来上がる厚板はそれぞれ顧客のニーズに合わせて厚さや長さが調整されており、高いプロセス技術の一端を垣間見ることができたと思います(写真4、残念ながら内部は写真撮影禁止)。製鉄所見学の後は技術開発センターに移動し、始めに新日鐵株式会社の環境社会報告書について説明を受け、



写真4 圧延工程

廃棄物削減・リサイクル・新たな環境負荷物質への対応などの幅広い課題に取り組む研究の様子を知ることができました。また、その中から製鉄所における省エネルギー技術の開発、製鉄所内のガスの有効利用について詳しく説明を受けました。実際に研究所で研究を行っている方々からの説明は、内容だけでなく研究に対する熱意や意欲といったものも感じることができ、私たちにとって大きな刺激となりました。

1日目の見学後、ホテルでは夕食として立食形式の懇談会が開かれ、各人がそれぞれ自己紹介を行いました。2日目に向けてのプレゼンテーションの準備が夕食後に残っているものの、このときばかりはみなリラックスしており、全員の前で自己紹介や自国の紹介をしたり、各テーブルで会話に花が咲いたり賑やかな懇談の場となりました(写真5)。食事後は各グループで別室に移動し、見学で得た情報をまとめて次の日のプレゼンテーションの完成に精を出しました。



写真5 懇談会での自己紹介

7日の朝は9時から各グループのプレゼンテーションが行われました(写真6)。グループごとに専門分野が違うため、異なる視点から製鉄事業における持続可能な開発について考えられていました。異なる分野の学生の意見を聞くということは非常に新鮮であるし、そのせいか学生からの質問が盛んに出ており、学生同士の議論がとても活発に行われていました。新日鐵の方々も参加していただけたので、より密度の濃い議論が展開されたと思います。発表会終了後は、大岡山キャンパスへと帰路に着くことになりましたが、途中で行きにもよった海ほたるでお昼ごはんを食べることになり、東京湾に浮かぶ船



写真6 各班発表の様子

を見ながら、海風を楽しむことができました。

今回の1泊2日の新日本製鐵株式会社君津製鉄所の見学では、持続可能な開発に向けて具体的にどのようなことが行われており、さらにどんな研究が進められているのかを詳しく知ることができ、今後の研究をしていく上での糧となる貴重な体験をすることができたと思います。学生同士の交流の場としても非常に実のあるものとなったと思います(写真7)。



写真7 君津テクノロジーセンター前にて記念撮影

最後になりましたが、このような貴重な機会を設けていただきました新日本製鐵株式会社の宇佐見明様、日比政昭様、茨城哲治様、永田俊介様、また各見学場所でご説明いただきました多くの方々に心から感謝いたします。

(理工学研究科土木工学専攻 修士2年)

—我が東工大の誇る体育系サークル—
競技スキー部
「寒い季節の熱い戦い」

アルペン主任 **日留川 領介**

みなさん、競技スキーと聞いて何を思い浮かべるでしょうか？今回は競技スキーについて、さらに私たち競技スキー部の活動について紹介します。

競技スキー部は、主にアルペン・ノルディックの2部門から成り立っています。アルペンとは、2本のポール(旗門)の間をいかに速く滑り降りてくるか、タイムを競う競技です。



ノルディックには、クロスカントリースキーとジャンプスキーがあります。クロスカントリースキーは平地を駆け抜け、坂道を上り、そして下るスキーです。雪上のマラソンとも言えます。ジャンプスキーは、ジャンプしてその飛距離と飛型の美しさを競うスキーです。



「冬以外は何をしているんですか？」とよく訊かれます。確かに実際にスキー場へ行って滑れるのは冬～春ですが、それ以外のオフシーズンにもしっかりと活動しています。オフシーズンの主な活動内容は水曜と土曜の週2日の駒沢公園往復マラソン、インラインスケート、ローラースキー、筋トレなどです。この全体練習以外にも、多くの部員が時間を見つけては自主練習に励んでいます。またノルディッ

クを中心に、高尾山でのトレーニングも行っています。

夏休み中には、アルペンはインライン合宿、ノルディックはローラースキー合宿なども行い、筋力面と技術面両方の向上を目指しています。



インラインスケート



ローラースキー

そしてシーズンに入ると、北海道や野沢温泉、梅池高原などで合宿を行います。合宿中はコーチや先輩に様々なアドバイスをもらい、雪上での練習に励みます。特にアルペンは、日本で数少ないプロのコーチと合宿を行います。

合宿や練習は、他大学と一緒にすることが多く、特に東京大学、一橋大学とは深いつながりを持ち、シーズン中のみならずオフシーズンも合同練習を行っています。

シーズン中には、多くの大会に出場します。主に全日本スキー選手権大会（インカレ）や全日本国公立大学スキー選手権大会などが挙げられます。アルペンは、シーズン最後に全国学生岩岳スキー大会という日本で最大規模の学生大会に出場し、シーズンを終えます。



東工大競技スキー部は全日本学生スキー連盟の3部ではありますが、最近ではアルペン・ノルディック共に人数が増えると同時に一人一人の戦力の向上も見られ、もう少しで2部に手が届くところまで来ています。その証拠に、多くの大会で沢山の賞状やメダルを獲得しています。

「温暖化が進むと絶対になくなるスポーツがある」というフレーズがあります。もしかすると将来スキーの出来ない時代が来てしまうかもしれません。だからこそ、スキーの出来る今、しっかりと自然の素晴らしさを感じ、皆で最高の思い出を作りたいと考えています。



この文章を読んで少しでも競技スキーに興味を持ってくれた新入生がいたら、ぜひ遊びに来てください!!!

東工大競技スキー部ホームページ

<http://titechski.web.fc2.com/framepage.htm>

皆さんからの応援をお願いします!!!

連絡先

日留川領介（理学部数学科 3年）

詳細はホームページをご覧ください。

【2007-2008シーズンの主な成績】

第81回全日本学生スキー選手権大会（3部）

男子総合 第6位 女子総合 第5位

第55回東京地区国公立大学スキー選手権大会

男子総合 準優勝 女子総合 第3位

第35回全国学生岩岳スキー大会

村長杯争奪スキー大会

男子総合 優勝

第28回全日本国公立大学スキー選手権大会

男子総合 第7位 女子総合 第3位

—我が東工大の誇る体育系サークル—
バレーボール部
「ボールに伝わる仲間の思い」

主将 藤田 紘司*
 文 勝田 仁之**

我々男子バレーボール部は、選手14人、マネージャー4人で活動しています。現在、関東リーグで14部中5部に、理工リーグでは5部中1部に所属しています。5部優勝し、4部に昇格できるように、月、水、金の週3回の練習を行っています。また、夏と春には合宿をすることでも心身ともに鍛えています。



他大学に比べて、皆実験や演習で忙しく練習時間が十分に確保できないため、集中力と頭脳を使ったプレーで練習量の多いチームに対抗しています。

また、練習時間が確保できる夏、春休みには練習試合を多くこなし、リーグ戦に向けてチームを作っていきます。



少ない練習時間を有効に活用し、試合に勝つのは、東工大生ならではの喜びを覚えます。

バレーボールというのは、いくら上手いプレーヤーでも1人の力で勝つことは絶対できません。レシーブ、トス、アタック…それぞれの仕事をプレーヤー全員がこなしチームのために協力し合うスポーツです。そのため、部員同士は時にぶつかりあい、時に励まし合いながら、共に目標のために日々成長していきます。個人が、チームが、毎日成長していくのを実感していくのはいいものです。忙しい毎日の中でもバレーボールを続けている所以です。



バレーボール部では、常に部員・マネージャー共に募集しています。皆さん、私達と一緒にバレーボールを通じて充実した大学生活を作り上げていきましょう。いつでも見学に来てください。お待ちしております。

東工大バレーボール部ホームページ
<http://titech-bare-hp.infoseek.co.jp>

(*工学部金属工学科 4年,
 **理学部物理学科 3年)

平成20年度 類別クラス担任・クラス担当助言教員等一覧

〔理 学 部〕

2008/4/1 現在

類主任	クラス	クラス担任教員	内線	部屋番号	クラス担当助言教員	内線	部屋番号
第1類 高橋栄一 教授 (地球惑星科学)	ア-1	下平 英寿 准教授 (情報科学)	3219	西8W-707	下平 英寿 准教授 (情報科学)	3219	西8W-707
	ア-2	廣瀬 敬 教 授 (地球惑星)	2618	石2-221	廣瀬 敬 教 授 (地球惑星)	2618	石2-221
	イ-1	河合 明雄 准教授 (化 学)	3847	本館3-57	河合 明雄 准教授 (化 学)	3847	本館3-57
	イ-2	武藤 一雄 准教授 (物 理 学)	2748	本館1-89	武藤 一雄 准教授 (物 理 学)	2748	本館1-89
	ウ-1	鷺見 直哉 准教授 (数 学)	2213	本館2-11	鷺見 直哉 准教授 (数 学)	2213	本館2-11
	ウ-2	植草 秀裕 准教授 (化 学)	3529	本館3-63	植草 秀裕 准教授 (化 学)	3529	本館3-63
	エ-1	村上 修一 准教授 (物 理 学)	2747	本館2-92	村上 修一 准教授 (物 理 学)	2747	本館2-92
	エ-2	金 英子 講 師 (情報科学)	3490	西8W-1105	金 英子 講 師 (情報科学)	3490	西8W-1105

〔工 学 部〕

類主任	クラス	クラス担任教員	内線	部屋番号	クラス担当助言教員	内線	部屋番号
第2類 田中順三 教授 (無機材料工学)	2-1	石川 謙 准教授 (有 機)	2437	南8-717	石川 謙 准教授 (有 機)	2437	南8-717
	2-2	史 蹟 准教授 (金 属)	3145	南8-214	史 蹟 准教授 (金 属)	3145	南8-214
	2-3	坂井 悦郎 教 授 (無 機)	3368	南7-818	坂井 悦郎 教 授 (無 機)	3368	南7-818
第3類 益子正文 教授 (化学工学)	3-1	石津 浩二 教 授 (高 分 子)	2634	本館2-61	川内 進 准教授 (高 分 子)	3757	南1-504
	3-2	高橋 孝志 教 授 (応 化)	2120	本館3-07A	高尾 俊郎 准教授 (応 化)	2623	南1-571
	3-3	太田口和久 教 授 (化 工)	2113	南1-419	久保内昌敏 准教授 (化 工)	2119	南1-470
第4類 岩附信行 教授 (機械知能)	4-1	宇治橋貞幸 教 授 (機械科学)	2158	西8W-506	足立 忠晴 准教授 (機械科学)	2156	石6-206
	4-2	中原 綱光 教 授 (機械知能)	2541	石1-304	齋藤 滋規 准教授 (機械知能)	3937	石1-403
	4-3	轟 章 教 授 (機械宇宙)	3178	石1-416	店橋 護 准教授 (機械宇宙)	3181	石1-210
	4-4	早川 朋久 准教授 (制 御)	2762	西8W-402	梅室 博行 准教授 (経 営)	2246	西9-420
	4-5	持丸 義弘 教 授 (開 発)	2164	石4-202	高橋 邦夫 准教授 (開 発)	3915	石4-201
第5類 中嶋正之 教授 (情報工学)	V-1	村田 剛志 准教授 (情報工学)	2684	西8E-503	村田 剛志 准教授 (情報工学)	2684	西8E-503
	V-2	阪口 啓 准教授 (電気電子)	3910	南3-1020	阪口 啓 准教授 (電気電子)	3910	南3-1020
	V-3	西山 伸彦 准教授 (電気電子)	3593	南3-823	西山 伸彦 准教授 (電気電子)	3593	南3-823
	V-4	金子 晴彦 講 師 (情報工学)	3799	西8E-606	金子 晴彦 講 師 (情報工学)	3799	西8E-606
	V-5	岡田 健一 准教授 (電気電子)	2258	南3-811(314)	岡田 健一 准教授 (電気電子)	2258	南3-811(314)
	V-6	山田 功 准教授 (情報工学)	2503	南3-502	山田 功 准教授 (情報工学)	2503	南3-502
	V-7	山岡 克式 准教授 (情報工学)	3763	南3-308	山岡 克式 准教授 (情報工学)	3763	南3-308
	V-8	中川 貴 准教授 (電気電子)	2394	南3-717	中川 貴 准教授 (電気電子)	2394	南3-717
	V-9	吉瀬 謙二 講 師 (情報工学)	3698	西8E-903	吉瀬 謙二 講 師 (情報工学)	3698	西8E-903
	V-10	塚越 秀行 准教授 (制 御)	3724	南5-315	塚越 秀行 准教授 (制 御)	3724	南5-315
第6類 宮本文人 教授 (建築学)	VI-1	福田 大輔 准教授 (土木・環境)	2577	緑5-204	高橋 章浩 准教授 (土木・環境)	2593	緑1-502
	VI-2	青木 義次 教 授 (建 築 学)	3154	緑1-306	横山 裕 准教授 (建 築 学)	3152	緑1-404
	VI-3	十代田 朗 准教授 (社会工学)	3474	西8W-606	田中 隆一 准教授 (社会工学)	3760	西8W-607

〔生命理工学部〕

類主任	クラス	クラス担任教員	内線	部屋番号	クラス担当助言教員	内線	部屋番号
第7類 石川智久 教授 (生命工学)	7-1	一瀬 宏 教 授 (生命科学)	5822	B2-820	朝倉 則行 講 師 (生命工学)	5769	B1-1013
	7-2	大隅 圭太 准教授 (生命科学)	5724	B2-835	藤平 正道 教 授 (生命工学)	5784	B2-1021
	7-3	三原 久和 教 授 (生命工学)	5756	B1-801	田中 幹子 准教授 (生命科学)	5722	B1-715

() 内は教員の所属を示す。

平成20年度 学科長及び2年次以降の助言教員名簿

2008/4/1 現在

学部・学科		学科長及び類主任			2年次助言教員			3年次助言教員			4年次助言教員		
		職名	氏名	内線	職名	氏名	内線	職名	氏名	内線	職名	氏名	内線
理学部	数 学 科	教授	二木 昭人	2201	准教授	村上 齐	3387	准教授	増田 一男	2215	各学士論文研究指導教員		
	物 理 学 科	准教授	伊藤 克司	2494	准教授	白水 徹也	2385	准教授	椎野 正壽	2077	准教授	伊藤 克司	2494
	化 学 科	教授	江口 正	2631	准教授	長谷川 健	2238	准教授	松本 隆司	3531	各学士論文研究指導教員		
	情 報 科 学 科	教授	佐々 政孝	3228	准教授	三好 直人	3218	准教授	鹿島 亮	3502	各学士論文研究指導教員		
	地球惑星科学科	教授	井田 茂	2620	教 授	河村 雄行	2616	教 授	河村 雄行	2616	教 授	河村 雄行	2616
	第 1 類 主 任	教授	高橋 栄一	2338									
工学部	金 属 工 学 科	教授	里 達雄	3139	准教授	河村 憲一	3137	准教授	竹山 雅夫	3138	准教授	金澤 幸	3586
	有 機 材 料 工 学 科	教授	柿本 雅明	2433	准教授	扇澤 敏明	2423	准教授	浅井 茂雄	2432	各学士論文研究指導教員		
	無 機 材 料 工 学 科	教授	柴田 修一	2522	准教授	篠崎 和夫	2518	准教授	安田 公一	2526	准教授	矢野 哲司	2523
	化 学 工 学 科 (化学工学コース)	教授	(学 科 長・ 化工コース長 黒田 千秋)	2115	准教授	渕野 哲郎	2474	准教授	関口 秀俊	2110	各学士論文研究指導教員		
		教授	(応化コース長 和田 雄二)	2879	准教授	鈴木 榮一	2118	准教授	桑田 繁樹	2150			
	高 分 子 工 学 科	教授	上田 充	2127	准教授	小西 玄一	2321	准教授	野島 修一	2132	各学士論文研究指導教員		
	機 械 科 学 科	教授	大熊 政明	2784	教 授	萩原 一郎	3555	教 授	花村 克悟	3705	教 授	杉本 浩一	2161
					准教授	大河 誠司	3308	准教授	八木 透	3628	准教授	伏信 一慶	2500
	機 械 知 能 シ ス テ ム 学 科	教授	中村 春夫	3173	准教授	山崎 敬久	2509	准教授	原 精一郎	2536	各学士論文研究指導教員		
	機 械 宇 宙 学 科	教授	平井秀一郎	3336	准教授	堀内 潔	2638	教 授	吉野 雅彦	2506	教 授	轟 章	3178
	制 御 シ ス テ ム 工 学 科	教授	藤田 政之	3813	教 授	奥富 正敏	3472	准教授	平田 敦	2163	教 授	藤田 政之	3813
	経 営 シ ス テ ム 工 学 科	教授	村木 正昭	2358	准教授	蜂谷 豊彦	2253	准教授	梅室 博行	2246	各学士論文研究指導教員		
	電 気 電 子 工 学 科	教授	岩本 光正	2191	教 授	岩本 光正	2191	教 授	荒井 滋久	2512	各学士論文研究指導教員		
	情 報 工 学 科	教授	秋山 泰	3645	教 授	秋山 泰	3645	教 授	上野 修一	2576	各学士論文研究指導教員		
	土 木 ・ 環 境 工 学 科	准教授	福田 大輔	2577	准教授	八木 宏	2591	准教授	竹村 次朗	2592	准教授	市村 強	3725
	建 築 学 科	教授	安田 幸一	2813	准教授	奥山 信一	3488	教 授	宮本 文人	2384	各学士論文研究指導教員		
社 会 工 学 科	教授	山室 恭子	2266	准教授	金子 昭彦	3313	教 授	宇佐美 誠	2933	教 授	山室 恭子	2266	
開 発 シ ス テ ム 工 学 科	准教授	神田 学	2768	准教授	阿部 直也	3797	准教授	神田 学	2768	各学士論文研究指導教員			
第 2 類 主 任	教授	田中 順三	2519										
第 3 類 主 任	教授	益子 正文	3036										
第 4 類 主 任	教授	岩附 信行	2538										
第 5 類 主 任	教授	中嶋 正之	2183										
第 6 類 主 任	教授	宮本 文人	2384										
生命理工学部	生 命 科 学 科	教授	工藤 明	5718	准教授	湯浅 英哉	5850	各コース主任			各学士論文研究指導教員		
	生 命 工 学 科	教授	濱口 幸久	2244	准教授	田川 陽一	5791	各コース主任			各学士論文研究指導教員		
	第 7 類 主 任	教授	石川 智久	5800									

平成20年度 専攻長一覧

2008/4/1 現在

(理工学研究科)

専攻等	職名	氏名	内線
数 学	教授	吉田 朋好	2206
基礎物理学	教授	垣本 史雄	2467
物性物理学	教授	奥田 雄一	2458
化 学	教授	小國 正晴	2222
地球惑星科学	教授	井田 茂	2620
物質科学	教授	藤本 善徳	2241
物質科学(副専攻長)	教授	住田 雅夫	2431
材料工学	教授	鶴見 敬章	2517
有機・高分子物質	教授	高田十志和	2898
応用化学	教授	三上 幸一	2142
化学工学	教授	黒田 千秋	2115
機械物理工学	教授	萩原 一郎	3555
機械制御システム	教授	北川 能	2550
機械宇宙システム	教授	大熊 政明	2784
電気電子工学	教授	荒井 滋久	2512
電子物理工学	教授	古屋 一仁	2568
集積システム	教授	酒井 善則	2193
土木工学	教授	三木 千壽	2596
建 築 学	教授	小河 利行	3156
国際開発工学	教授	高田 潤一	3282
原子核工学	教授	齊藤 正樹	3060

(生命理工学研究科)

専攻等	職名	氏名	内線
分子生命科学	教授	関根 光雄	5706
生体システム	教授	白髭 克彦	5812
生命情報	教授	工藤 明	5718
生物プロセス	教授	濱口 幸久	2244
生体分子機能工学	教授	岡畑 恵雄	5781

(総合理工学研究科)

専攻等	職名	氏名	内線
物質科学創造	教授	彌田 智一	5266
物質電子化学	教授	淵上 壽雄	5406
材料物理科学	教授	尾中 晋	5564
環境理工学創造	教授	石川 忠晴	5504
人間環境システム	教授	篠野 志郎	5604
創造エネルギー	教授	河野 俊之	5694
化学環境学	教授	中野 義夫	5432
物理電子システム創造	教授	梶川浩太郎	5596
メカノマイクロ工学	教授	小俣 透	5467
知能システム科学	教授	寺野 隆雄	5583
物理情報システム	教授	内川 恵二	5453

(情報理工学研究科)

専攻等	職名	氏名	内線
数理・計算科学	教授	小島 定吉	3207
計算工学	教授	森 欣司	2664
情報環境学	教授	樋口洋一郎	2651

(社会理工学研究科)

専攻等	職名	氏名	内線
人間行動システム	教授	早坂 眞理	2263
価値システム	教授	往住 彰文	2680
経営工学	教授	水野 眞治	2816
社会工学	教授	宇佐美 誠	2933

(イノベーションマネジメント研究科)

専攻等	職名	氏名	内線
技術経営	教授	比嘉 邦彦	3571
イノベーション	教授	長田 洋	8979

人事異動

[] 内は旧所属

(教員)

平成20年4月1日付

川口 博之：教授に採用



大学院理工学研究科化学専攻〔大学
共同利用機関法人自然科学研究機構
分子化学研究所生命・錯体科学研究
領域 准教授〕理学博士

④ 1967.11

④ 大阪大学理学部高分子学科1990, 同大学院理学
研究科高分子学専攻前期課程1992, 同基礎工学研究
科化学系専攻後期課程退学1994

⑤ 無機化学, 錯体化学

[学位論文] Electron-Deficient Chalcogenido
Complexes of Group 4-6 Transition Metals and
Carbon-Sulfur Bond Activation: 名古屋大学1996
内線 2234

阪口 啓：准教授に昇任



大学院理工学研究科電気電子工学専
攻〔大学院理工学研究科電気電子工
学専攻 助教〕学術博士(情報通信
工学)

④ 1973.11

④ 名古屋工業大学工学部電気情報工学科1996, 東京
工業大学総合理工学研究科物理情報工学専攻博士
課程中退2000

⑤ 情報通信工学

[学位論文] MIMO Channel Measurement and
Analysis for Future Wireless Communications: 東京
工業大学2006 内線 3910

内田 健：准教授に採用



大学院理工学研究科電子物理工学専
攻〔株式会社東芝研究開発センター
主任研究員〕工学博士

④ 1971.3

④ 東京大学理学部物理学科1993,
同大学院工学系研究科物理工学専攻修士課程1995

⑤ デバイス物理, VLSI

[学位論文] シリコン単電子素子とその集積回路へ
の応用に関する研究: 東京大学2002 内線 3591

藤井 俊彰：准教授に採用



大学院理工学研究科集積システム専
攻〔名古屋大学大学院工学研究科
准教授〕工学博士

④ 1968.1

④ 東京大学工学部電子工学科1990,
同大学院工学系研究科修士課程1992, 同博士課程
1995

⑤ 3次元画像工学, 画像通信, 画像処理

[学位論文] 3次元統合画像符号化の基礎検討: 東
京大学1995 内線 3902

村上 聡：教授に採用



大学院生命理工学研究科分子生命科
学専攻〔大阪大学産業科学研究所
准教授〕理学博士

⑤ 蛋白質結晶学, 構造生物学

[学位論文] Strategy of crystalliza-
tion of membrane protein complex, Cytochrome *bc*₁
complex from bovine heart: 大阪大学1997 内線
5748

徳永 万喜洋：教授に採用



大学院生命理工学研究科生命情報専
攻〔情報・システム研究機構国立遺
伝学研究所構造遺伝学研究センター
教授〕理学博士

④ 1959.10

④ 東京大学理学部物理学科1982, 同大学院理学系
研究科修士課程1984, 同博士課程1987

⑤ 生物物理学, 1分子生物学

[学位論文] Structure of Skeletal Muscle Myosin:
Location of the ATPase Site and the Light Chains:
東京大学1987 内線 5711

よしざわ みちと
吉沢 道人：准教授に採用



資源化学研究所共通部門 [東京大学大学院工学系研究科 助教] 工学博士

Ⓔ 1974.4

Ⓒ 東京農工大学工学部物質生物工学科1997, 東京工業大学大学院総合

理工学研究科化学環境工学専攻修士課程1999, 名古屋大学大学院工学研究科物質化学専攻博士課程2002

Ⓓ 超分子化学, 錯体化学

[学位論文] Cavity-Directed Syntheses within Self-Assembled Coordination Cages: 名古屋大学2002 内線 5284

おがわ たかよし
小川 高義：教授に採用



外国語研究教育センター文化コミュニケーション部門 [横浜市立大学国際総合科学部 准教授] 文学修士

Ⓔ 1956.2

Ⓒ 東京大学文学部英語英文学科

1979, 同大学院人文科学研究科修士課程1982

Ⓓ 米文学, 翻訳

[学位論文] *A Personal Cosmology: Steinbeck's Vision of Man and His World*: 東京大学1982 内線 3525

ひろた じゅんじ
廣田 順二：准教授に採用



バイオ研究基盤支援総合センター基盤部門 [大阪府立大学大学院理学系研究科 准教授] 工学博士

Ⓔ 1967.7

Ⓒ 東京工業大学工学部生物工学科

1990, 同大学院生命理工学研究科修士課程1992, 同博士課程1995

Ⓓ 分子神経科学, マウス遺伝学

[学位論文] Kinetic studies on calcium release by the inositol 1,4,5-trisphosphate receptor: 東京工業大学1995 内線 5830

(事務職員)

平成20年4月1日付

ないとう ひでひと
内藤 秀人：採用 財務部主計課長 [文部科学省文教施設企画部施設助成課予算総括係長]



Ⓔ 1969.12

Ⓓ 千葉大学真核微生物研究センター一等事務部, 文部省教育助成局施設

助成課, 同初等中等教育局施設助成課, 同予算総括係主任, 同執行第二係長, 同文教施設企画部施設助成課執行第二係長, 同執行第一係長, 同執行係長, 同予算総括係長

くさなぎ ひさお
草薙 久男：採用 学務部学生支援課長 [総合研究大学院大学総務課課長補佐]



Ⓔ 1960.2

Ⓓ 大学入試センター, 東京工業大学, 同教務部入試課入試企画掛長, 同入試実施掛長, 同学務部入試課入試実施掛長, 同総務部人事課第二給与掛長, 同総務課法規掛長 (命) 評価室付, 同法規係長, 総合研究大学院大学総務課課長補佐 (命) 評価室長

すさき しげひろ
須崎 茂弘：採用 施設運営部施設総合企画課長 [名古屋大学施設管理部施設企画課長]



Ⓔ 1958.1

Ⓓ 京都大学施設部建築課, 文部省文教施設部大阪工事事務所, 同工管係主任, 同札幌工事事務所工管係長, 同技術課専門職員, 同建築第二係長, 同建築第一係長, 山形大学企画課長, 大阪大学建築課長, 同管理課長, 名古屋大学施設企画課長

おがわ あきら
小川 昭：採用 施設運営部施設整備課長 [京都工芸繊維大学施設マネジメント課長]



Ⓔ 1950.2

Ⓓ 東京大学, 茨城大学施設課工管係長, 同工管第一係長, 東京大学建築課建築第一掛長, 同建築第六掛長, 同建築第四掛長, 同工管第一掛長, 同設計第一掛長, 同工事計画掛長, 東京医科歯科大学建築課補佐, 東京大学整備計画課補佐, 徳島大学計画整備課長, 京都工芸繊維大学施設マネジメント課長

佐野 護^{さの まもる}：採用 研究協力部研究業務課長 [北海道大学学術国際部研究協力課長]



Ⓔ 1966.6

Ⓖ 国立磐梯青年の家事業課，国立中央青年の家庶務課，文部省生涯学習政策局生涯学習振興課，放送大学学園教務部修学指導課，文部省学術国際局研究助成課研究協力室，同科学研究費助成企画室，日本学術振興会会計課主計係長，同主計課主計係長，文部省学術国際局国際学術課庶務係長（兼）極域研究業務係長，同科学技術・学術政策局国際交流官付庶務係長，同研究振興局学術研究助成課科学研究第一係長，同庶務係長（兼）研究協力係長，群馬大学総務課長，北海道大学学術国際部研究協力課長

筑作 康志^{みつくり やすし}：採用 研究協力部国際事業課長 [日本学術振興会]



Ⓔ 1962.8

Ⓖ 日本学術振興会，同事業部国際情報課情報第二係長，同総務部庶務課庶務係長，国際日本文化研究センター管理部研究協力課専門職員，日本学術振興会ワシントン研究連絡センター，同国際事業部国際情報課情報第一係長，同兼：研究者国際交流センター専門職員，同兼：国際情報課情報第二係長，独立行政法人日本学術振興会国際事業部国際情報課情報第一係長，同兼：研究者国際交流センター専門職員，同研究協力第一課海外センター係長，同兼：南北アメリカ係長，同総務部研究者養成課専門員，文部科学省科学技術・学術政策局調査調整課専門官，独立行政法人日本学術振興会

富田 健市^{とみた けんいち}：採用 学術情報部情報図書館課長 [筑波大学附属図書館情報管理課長]



Ⓔ 1956.5

Ⓖ 北海道大学，京都大学，国際日本文化研究センター情報管理施設資料課文献資料係長，京都大学附属図書館情報管理課システム管理掛長，学術情報センター事業部目録情報課専門員，国立情報学研究所国際・研究協力部成果普及課課長補佐，長岡技術科学大学教務部図書課長，筑波大学附属図書館情報サービス課長，同情報管理課長

土屋 貢^{つちや みつぐ}：昇任 すずかけ台地区事務部長 [大岡山第二事務区事務長]



Ⓔ 1948.10

Ⓖ 東京工業大学，同原子炉工学研究所経理掛長，同経理部主計課第二管財掛長，同第一管財掛長，同総務掛長，同専門職員，国立教育政策研究所会計課課長補佐，東京工業大学経理部主計課課長補佐，同学務部教務課課長補佐，同田町地区事務区事務長，同大岡山第二事務区事務長

篠原 岩雄^{しのはら いわお}：昇任 すずかけ台地区事務部会計課長 [財務部主計課課長補佐]



Ⓔ 1956.9

Ⓖ 東京工業大学，日本学術振興会，東京工業大学，国立教育研究所庶務部会計課管理係長，東京工業大学経理部主計課予算掛長，同監査掛長，同総務掛長，国立教育政策研究所総務部会計課課長補佐，東京工業大学財務部契約課課長補佐

満尾 俊一^{みつお しゅんいち}：採用 事務局付（国際企画担当）[文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室海外協力官]



Ⓔ 1964.7

Ⓖ 鹿児島大学，大隅少年自然の家庶務課，文部省大臣官房総務課文書管理班，同初等中等教育局中学校課，同高等学校課，同高等学校課高校教育改革推進室入試係長，同学術国際局国際企画課国際教育室企画係長，同教育文化交流室海外協力企画係長，同大臣官房国際課国際交流政策室海外協力企画係長，同国際協力政策室海外協力政策係長，鹿児島大学総務部総務課長，群馬大学研究推進部国際交流課長，文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室海外協力官

東工大クロニクル No. 432

平成20年5月28日 東京工業大学広報センター発行©

広報センター長 大倉一郎（企画担当理事・副学長）

東工大クロニクル編集グループ

編集長 山中浩明（総合理工学研究科准教授）

副編集長 塚越秀行（理工学研究科准教授）

増田一男（理工学研究科准教授）

菅 耕作（生命理工学研究科准教授）

鹿島 亮（情報理工学研究科准教授）

小西秀樹（社会理工学研究科教授）

藤村修三（イノベーションマネジメント研究科教授）

細田秀樹（精密工学研究所准教授）

林 克郎（応用セラミックス研究所准教授）

秦 誠一（精密工学研究所准教授）

住所：東京都目黒区大岡山2-12-1-E3-3 〒152-8550

電話：03-5734-2975, 2976 FAX：03-5734-3661

E-mail：kouhou@jim.titech.ac.jp URL：http://www.titech.ac.jp/